

<p>全体的な所感 (相談内容の 傾向) 特に気 になった点</p>	<p><介護保険関係からの相談の増加></p> <p>新規相談が多かった。相談者としては本人や家族よりも地域包括支援センターやケアマネジャーなど介護保険の支援者や、ヘルパーや行政からの相談が多かった。内容としては介護保険サービスから障害者総合支援法のサービスへの移行や、介護保険サービスの併用、障害年金、障害者手帳の取得やそれに伴うサービスの利用など様々であった。</p> <p><体調不良の原因の可能性></p> <p>体調を崩す方が多く、受診や入退院の相談とその後のサービス調整が多かった。今回は暑さが直接関係する体調不良ではなく、障がいの進行や病気の再発が原因となることがほとんどであった。気候の変化に伴う体調不良と思い込んでいたら危険な場面もあり、本人の体調の変化には様々な可能性を考える必要がある。</p>
<p>連携の取れた ケースや工夫 したケース等</p>	<p><情報の共有から早期発見へ></p> <p>本人の体調に異変があった際、ヘルパーや生活介護、病院、友人・知人など普段から本人と関わっている人たちと密に連絡を取り合っていたために、早くから対応できた。このときに情報を多く集めることができたので、原因の早期発見にもつながった。その後、生活環境を見直す必要が生じたときは個別支援会議を行い、関係者で情報を共有し、お互いの役割を明確にしながら本人の希望する生活を整えるよう心がけた。</p>

<p>全体的な所感 (相談内容の 傾向) 特に気 になった点</p>	<p>虐待や金銭搾取等の権利侵害を受けている、を受けていると思われるケースへの支援が目立った。</p> <p>状況改善のためには、日中活動事業所やヘルパー事業所、虐待防止センター、行政等と問題意識や目標を共有して対応しなければならない。しかし、それが上手くいかない場合があり、本人の生活状況が改善しないことに焦燥感を感じることもある。</p> <p>そもそも権利侵害への対応については、「こうすればよい」という明解な回答がある訳ではなく、そのときの状況を総合的に判断して、支援しなければならない。</p> <p>障害者虐待防止法が施行され、障がいを持つ方の人権を守ろうという機運が高まっている。ケースの対応だけに終始するのではなく、「そのときの判断」が正しかったのかどうか、振り返る仕組みも必要だろう。</p>
<p>連携の取れた ケースや工夫 したケース等</p>	<p><各機関が情報を共有したことにより、支援方針を建設的に考えられたケース></p> <p>複数の生活課題があるにもかかわらず、本人はすぐ就労希望をし、ハローワークや就業・生活支援センター、日中活動事業所が支援方針等に困ってしまったケース。</p> <p>単一機関の支援では対応の仕方に行き詰ったり、本人との関係が煮詰まってしまったので、情報の共有を図り支援方針を決めるために個別支援会議を実施した。その場で今まで知らなかった過去の事実を知ることができ、本人の強みについても再認識することができた。</p> <p>今後も関係機関同士協力して支援を継続していきたい。</p>

<p>全体的な所感 (相談内容の 傾向) 特に気 になった点</p>	<p>家族(親・兄弟)から「家族が亡くなったり、高齢になったことで状況が変わり、これからの生活をどうしていくか、将来のことを考えると不安」という内容の相談が複数あった。本人の状況を踏まえた上で、病院や訪問看護、ヘルパー、家族も含めて話し合い、制度利用につなげる等の支援を行った。</p> <p>現状の不安を相談してもらうことで、具体的な支援にもつながり、本人主体の生活を支えることで、少しずつではあるが家族が今まで担ってきた役割を軽減できたケースもあった。</p>
<p>連携の取れた ケースや工夫 したケース等</p>	<p>〈放課後等デイサービスからの相談〉</p> <p>放課後等デイサービスを利用している児童の家族やその家族関係を心配した支援者から相談があり、家族、関わっている学校の先生、デイサービスの支援者含め、状況の確認や今後について相談。</p> <p>おそらく本人は感覚の過敏さがあると思われることや、本人の行動の理由を話し合い、伝えたことで、家族も「もしかしたら、本人も困っているのでは?」と理解のきっかけになった。今後はまだ課題は多いが、本人の困っていることへのフォローが届くと良いと思っている。</p>

<p>全体的な所感 (相談内容の 傾向) 特に気 になった点</p>	<p>児童発達支援や放課後等デイサービスについて、どんなことをするのかといった疑問や手続きについてなどの相談は、時期などに関わらず一定量あるように感じる。療育に対してのイメージには、ばらつきがあるので丁寧に話を聞き取っている。また言葉が出ない、かん黙、ある発音がうまく言えないといった言葉に関する相談も随時ある。言葉に関しての相談は年齢によって対応が違ってくことも多いが、発達支援の観点から相談に応じている。</p> <p>この時期の特徴として、保育園、幼稚園、学校で懇談会が行われ、子どもの普段の様子から発達の課題や困りごとを指摘されたという相談がある。また、夏休み期間ということで親子で過ごす時間が増え、困り感をより顕著に感じるという相談もあった。保護者の不安を聞きとりながら、子どもへの支援をしている。</p>
<p>連携の取れた ケースや工夫 したケース等</p>	<p>〈幼稚園・保育園と連携が取れたケース〉</p> <p>保護者や幼稚園・保育園、子どもの家の先生から「子どもの対応に困っている」「保護者も困っている様子」といった相談があった。そういった場合、園での困りごとと保護者が感じている困りごとが違うこともあるため、丁寧な聞き取りを心掛けている。実際、園に出向き園での様子を見たり、先生から話を聞いたりすることで、顔の見える関係ができ、先生や保護者との連携は少しずつではあるが進んでいるように感じる。</p> <p>〈世帯で支援が必要なケース〉</p> <p>家族関係が複雑なケースや保護者自身に支援が必要なケースがあった。他支援センターや学校、園、行政機関、児童相談センター等と協力しながら、それぞれの役割を確認し連携が取れるように支援体制を整え、協力しながら支援にあたっている。</p>

<p>全体的な所感 (相談内容の 傾向) 特に気 になった点</p>	<p>新規・継続利用者は、身体16人・知的34人・精神34人・児童1人・重複障がい4人。相談回数としては、精神障がいに関する相談が最も多く、当事者本人よりも家族からの相談が増加傾向にある。</p> <p>障がい者虐待防止ホットラインへの通報・相談は1件であった。</p> <p>高齢者と障がいの世帯や本人とは異なる障がいをもつ家族のいる世帯の支援も多く、地域包括支援センター・医療機関・福祉サービス事業所等の他機関からの相談・問い合わせが増えている。</p> <p>相談内容としては直近で発生した課題ではなく、長期間にわたって抱えてきた課題も少なくない。それらのケースの多くが当事者と支援者(家族など)との間に、認識や危機感のずれが大きいように思われた。当事者の支援は当然だが、世帯全体の状況を視野に入れた支援の必要性も感じている。</p>
<p>連携の取れた ケースや工夫 したケース等</p>	<p><母子の安定した生活に繋がったケース></p> <p>精神障がいのある母親と発達障がいのある子どもを、ヘルパー事業所や以前入所していた施設、学校等と連携を取りながら支援しているケース。母親は自発的に相談ができない傾向にあったが、ヘルパーと一緒に母親の子育てに関する不安や子どもの不登校などの課題を整理した。また、施設等と連携しながら、母親の不安の受容や子どもの学校生活に対する助言などに繋げることができた。</p> <p>子どもに対しては療育手帳の取得や福祉サービスの利用に向け、母親に対しては子育ての不安を減らしていけるよう支援を継続している。</p> <p>母子支援を行う事で、母子の安定した生活に繋がっている。</p>